

青島神社：植生

青島はほとんど亜熱帯の森で覆われています。最も多く見られる木は常緑のビロウ (*Livistona chinensis*) で、青島のいたるところに生えています。ビロウは何世紀にもわたって、この島の代名詞的存在になっています。5,000 本ほど生えているビロウの中には、最大で樹齢が 350 年のものまであります。ビロウは最大 15 メートルの高さまで育ち、春には白または黄色の小さな花を咲かせます。そして緑の実が晩秋に熟して地面に落ちます。扇型の葉は、平安時代 (794-1185) に重宝されました。青島のビロウの葉は、京都の宮中に納められていたのです。牛車を覆って、乗っている貴族や高官を風雨から守るために使われていました。どうして青島にはビロウが育つのに宮崎県の本土には育たないのかは、完全に解明されているわけではありませんが、これに関しては 2 つの仮説が提唱されています。1 つは、種または幹が日本の太平洋岸に沿って北東に流れる黒潮に乗って南から島に流れ着いたという説です。もう 1 つは、ビロウは青島の土着種で、この地域の気候が現在よりずっと温暖だった数百万年前から生き残ってきたという説です。

青島に生えるその他 225 種の植物のうち特筆すべき種には、毒のあるクワズイモ (*Alocasia odora*)、夏に花を咲かせる白い彼岸花の 1 種浜木綿 (*Crinum asiaticum*)、車輪梅 (*Rhaphiolepis umbellata*) などがあります。車輪梅は小さな低木で、伝統的に煮出して染料を作るのに使われてきました。来訪者はさらに、ヒギリ (*Clerodendrum japonicum*) やフウトウカズラ (*Piper kadsura*)、それにタブノキ (*Machilus thunbergii*) に会うこともできるかもしれません。ヒギリは通常約 2 メートルの高さの低木で、初夏から初秋にかけて鮮赤色の花を咲かせます。フウトウカズラはベリーのような実が晩夏に橙色になります。タブノキは月桂樹の 1 種の常緑広葉樹で、高さは 30 メートルになることもあり、タブノキより若いビロウの森の中でひととき高くそびえ立ちます。